

本屋のいいところ

書店と本屋さん「本を売っているお店」という意味では同じですが、書店は“空間”を、本屋は“人”を指す言葉だと言われています。

「本屋」のいいところは店主や店員さんの顔が見えていること。書店に比べて小さいけど、店主や店員さんの好きなものが色濃く反映されていて、頭の中を覗き込んでいるような楽しさがあります。

図書館のいいところ

本は、人類が誕生してから今日に至るまで受け継がれてきた知性と知識の器で、これらを集めて展覧する図書館は知性と知識の箱だと思っています。こんな空間をタダで利用できるなんて、図書館って素敵な場所です。

思い出の1冊との出会い

『幅書店の88冊 あとは血となれ、肉となれ。』

1冊の本を紐解くと、数珠繋ぎのように新たな本が現れてくる。

本が紡ぎだす無限の世界、本を編集するということをこの本から学びました。普段本をまったく手に取らない方にこそ手に取っていただきたい1冊です。全部読まなくてもいいので、数ページだけ読んでみてください。あなたの中に“本の遅効性”のきっかけが生まれるはずですよ。

有限会社BACH

ブックディレクター 三條 陽平

1987年生まれ。TSUTAYA TOKYO ROPPONGI、代官山 蔦屋書店の建築・デザイン書の担当を経て、幅 允孝氏率いる選書集団BACHに入社。ブックディレクターとして本と人との出会いや魅力を伝えるべく活動中。

本屋のいいところ

今現在流行っていること、話題になっていることがここにある。
それが新刊書店のいいところ。
一度役目を終えた本が、次の読者の元に行き、新たな役目を負う。
それが古本屋のいいところ。
そしてどちらも、欲しい本を購入という手段で自分のものにする
ことができる。
こんな楽しい所があるだろうか。

図書館のいいところ

森羅万象古今東西あらゆる物事が記された本が、あらゆる作家が紡ぎ出した物語が、本のプロの手によって並べられている。
しかもどの本も読むことができる。
全ての人に開かれ全ての人に本を提示し、未来に向けて保管されている。
こんなすごい所があるだろうか。

思い出の1冊との出会い

小さい頃から本が好きでした。
でも中学生の時に、何を読めばいいのか、自分の求める本が何かわからなくなっていたのです。
高校の図書室。入口すぐの棚にそれらの本は並んでいました。
田中芳樹、栗本薫、藤本ひとみ。当時はまだラノベという言葉はありませんでした。
でも10代向けの本はちゃんとあったのです。僕のことを待っていてくれたのです。

ああ、こんなに面白い本があるのかと、棚の本を片っ端から読みました。そんな思いから、今では10代向けの本を扱う古本屋を営んでいます。

大吉堂 店主 戸井律郎

大阪市阿倍野区の古本屋。
YA（ヤングアダルト）、児童書、ラノベ、ジュブナイルなど「10代の心（実年齢問わず）を刺激する本」を扱っています。10代の居場所「10代のヒミツキチ」も画策中。
店主はそんな本が大好きな古いオタク。昔も今も未来も本を読んでいます。

本屋のいいところ

思わぬ本との出会い。そして、思わぬ人との出会い。

図書館のいいところ

絶版で古書流通もしておらず、電子書籍にもなっていない本も読める！ところ。調べものがしやすいところ。

思い出の1冊との出会い

大学生の時、梅田の紀伊國屋書店で水木しげるさんの『ほんまにオレはアホやろか』を発見！「何だこのパンチの効いたタイトルは一っ!？」くらいの軽い気持ちで買った本が、思いがけず一生モノの本に…。

この本がなければ本屋を始めることもなかったかもしれず、自分次第で人生バラ色!と思わせてくれます。パンチ大事!と、パンチの効いた店名で、本屋を始めようと思ったとか思わなかったとか。

本は人生のおやつです!!

店主 坂上友紀

大阪の堂島で新刊書籍と古本と雑貨の店をしています。今年2020年で10周年を迎えます☆

本屋のいいところ

新刊本やコミック・雑誌等を購入し、自分の所有物として永久に保管できる。また日々新刊本や雑誌が入荷するので世間の「トレンド」が発見できる。店内を見まわしていると目的以外の新しい発見がある。本屋で販売している本は、購入者から著者に印税が支払われている。

図書館のいいところ

資料が充実していて、それを良く知っている司書さんが調べ物の援助をしてくれる。また中央図書館にはとても古い（絶版本）が蔵書されている。おはなし会や色々なイベントが企画されている。自動車文庫は図書館にまで行けない人にはとても便利なシステムだと思う。

思い出の1冊との出会い

高田郁「銀二貫」

OsakaBookOneProject（大阪ほんま本大賞）第一回選定作。大阪の書店が協力して1冊の本を売るという今までに無かった試み。大型書店から町の本屋まで同業他店がONE TEAMになる事に力強さを感じた。なにより、地元「天満」が舞台のこの小説をたくさんのお客様に届けられた。読み終えた後、とても良い気持ちになれるこの作品を、これからも大切に読者に届けていきたい。

株式会社西日本書店

日本一長い天神橋筋商店街にある1975年創業の町の本屋です。

地域密着型で定期購読誌の配達など、地元のお客様にご愛顧いただけるお店を目指しています。

本屋のいいところ

例えば、「料理本」は実用書のコーナーだけでなく、エッセイ、旅行、文学、絵本・

色々な棚に並べられる可能性があり、どのような本をどのように並べるかというところに、本屋の個性が滲み出ているように思います。

一軒だけではなく、何軒も回ることで、一層本屋を楽しめるような気がします。

図書館のいいところ

どの図書館へ行っても、本が同じルールで系統立てて並べられている安心感があります。

また、様々な読書への挑戦を応援してくれる場所であると思います。私自身、図書館で借りて好きになって、同じ著者の本を本屋で購入したことが何度もあります。

そんなところでも、図書館と本屋は繋がっているような気がします。

思い出の1冊との出会い

小学生の時、図書室でアンデルセンなどをよく借りていましたが、ある日、江戸川乱歩の少年探偵団シリーズの「赤い妖虫」という本を見つけました。

その表紙には、険しい顔で電話の受話器を持つ少年、そして赤いサソリが大きく描かれており、子ども心に「なんて恐ろしい本なんや！」と震え上がりました。以来、その本をラスボスとし、様々な推理探偵ものを借りまくり、挑戦のときが来しました。

感想は、「意外と怖くないやん！」でした。

でも、この事をきっかけに読書の世界が広がった気がします。

ホホホ座 西田辺 鈴木由佳

2017年より、大阪市阿倍野区にて日常生活の中で気軽に本を手にとれる場所として営業中。小説・エッセイ、絵本、暮らし、懐かしい本、不思議な本など、日々の生活が楽しくなるような古本を中心に、新刊書籍や雑貨も少しお取り扱いしています。

本屋のいいところ

本を読むことは著者と会話をするようなものだと思います。1冊の本には、著者の考えかたや生きかた、人生が詰まっています。

そして私はこだわってセレクトされた本屋さんに行くと、店主さんから大切な友人を紹介されたような気持ちになります。気の合う素敵な一生の友人を見つけられる場所。それが本屋さんです。

図書館のいいところ

誰にでも本を読んで何かを知りたいと思ったり、誰かの考えに触れたり、心だけ別の世界に行きたい時があります。図書館は、その大切な気持ちを「お金がないこと」を理由に諦めなくてもいいようにしてくれる、とても大切な場所です。

思い出の1冊との出会い

小さい時に身体が弱くて外で遊べなかったのも、図書館でたくさん本を読みました。中でも印象に残っているのは『ショートショート of 広場』という、星新一さんが審査員をつとめた「ショートショート・コンテスト」という賞の優秀作だけを集めたシリーズです。ワクワクする話・不思議な話・怖い話・優しい話など、短いのに深い魅力を持ったお話がぎゅうぎゅう詰まっていて、外で遊べない私も空想の世界で思い切り遊ぶことができました。

インディーズ出版物のお店・シカク 代表 たけしげみゆき

インディーズ出版物のセレクトショップ兼ギャラリー「シカク」代表。自身の店舗とレーベル「シカク出版」「シカクオンガク」で、イベントや出版物の企画、編集、デザイン、コンセプト設計などを幅広く行う。また、店舗経営で培った独自の目線によるコラム執筆やイベント出演、講義など、多岐にわたって活動中。